清と給血者血清との間に沈降反応を実施したが、沈降素の証明は不成功に終つた。真の意味での發熱反應は Pyrogen によるものとされ、最近頃に減少しつゝあるが、他方アレルギー反應は、受血者のアレルギー性素因に關係し、殊に喘息患者などには頻發する。この兩者とも、その發現は肝機能と關係ありと思われるが、現在迄のところ、肝障害高度の場合以外は積極的結論がえられていない。また貧血の程度と副作用との間には密接な關係があり、Hb 50%以下では症状が多發する。兩反應とも、各種麻酔下においてはその發現が著しく阻止され、特にカクテルによる強化麻酔下では全く副作用が發現してこないことは、自律神經性調節の面から考え併せて興味深い。

137. 日本住血吸蟲症の産婦人科領域に及ぼす影響

(久留米大) 宮原通顯, *坂本英雄

久留米周邊地區に今なお蔓延せる日本住血吸蟲症の産婦人科領域に及ぼす影響について、今迄にえた臨牀的觀察並びに動物實驗成績を報告する。

- 1) 初潮發來狀態：臨牀的觀察により明らかに遅延を認め、d.d 系同腹マウスを用いた實驗においても遅延を認めえた。
- 2) 月經狀態：臨牀的には整調な者が多數であり、實驗的に Cercaria 大量感染の場合、性周期に著變を認めた。
- 3) 妊娠及び分娩率：臨牀觀察並びに動物實驗において、妊娠率及び分娩率は健康人並びに健康動物のそれと大差ない。
- 4) 流・早産率：臨牀觀察により高率な流・早産を認め、動物實驗においても大量感染の場合、極めて高率に流・早産を認めた。
- 5) 先天感染の有無：モルモットについて先天感染を證明しえた。この時の胎兒への Cercaria 侵入経路は、血行すなわち胎盤感染によることを認めた。
- 6) 兒の發育に及ぼす影響：實驗的に分娩後時日の経過と共に、外觀並びに體重に著變を認めた。

138. 陰部癢痒症のインシュリン、ビタミンB₁療法の検討

(大阪醫大) 小島 秋, *小原正司, 守屋光陽, 畑 孝雄

陰部癢痒症は種々の原因によつて惹起され、その治療法も古來から數多くの方法が試みられているが、効果のあるものは極めて少い様である。しかも癢痒を訴える患者は比較的多く最近は内外を問わず増加の傾向を示し、ために患者は苦惱に陥っている現状である。

わが教室においてもこれが治療を検討し、インシュリン、ビタミン B₁ 療法を行つたところ、從來の治療で全く効を奏しなかつたものを含めて、驚く程速やかな効果を認めえたので、些か検討を試みた次第である。

被檢者は過去 2 年間に當科外來を訪れた癢痒患者、特に明らかな原因を有しないものを主に選擇した。すなわち癢痒部の皮膚が比較的無疵で、蛔蟲、トリコモナス、カンヂダなどに起因するものを除外した。

その成績は被檢者の 80% 以上に著効を奏し、2 日乃至 7 日間の治療で今迄の激烈な癢痒の明らかな消失を認めた。

これらの治療と併行して、治療患者の糖代謝機能を種々検査した結果、尿糖反應陰性にかゝらず、血糖値の上昇、若しくは血中焦性ブドウ酸値の亢進していることを認めた。無効例では正常で分泌異常によるものと考えられた。

從來癢痒症の原因として糖尿病が擧げられているが私たちの經驗から尿糖反應が全く陰性であるのに血糖が比較的高かつたり、血糖が正常であるのに焦性ブドウ酸値が高い、所謂潜在性の糖代謝障害が存在しているものが案外に多いことが認められた。

要するに糖尿病の發現が最初に皮膚に現われるものか、それとも皮膚だけに限られた局所性の糖尿病が存在するかは不明であるが、本態性陰部癢痒症患者の相當數において、間腦系の糖代謝中樞の軽度の障害があり、その結果インシュリン及び焦性ブドウ酸燃焼因子たるビタミン B₁ 治療が著効するものと考えられる。